

2019年度「心の輪を広げる体験作文」における  
最優秀賞（内閣総理大臣賞）受賞について

令和元年12月13日

高 校 教 育 課

○最優秀賞（内閣総理大臣賞）受賞

- ・ 国東高等学校双国校 2学年 長谷川歩（はせがわ あゆみ）  
高校生区分 作品タイトル 「障がい者の家族として」

**【賞の概要】**

- ・ **主催者等** 内閣府並びに都道府県及び政令指定都市の共催
- ・ **内 容** 「障害者週間」の実施に伴い、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間ポスター」を公募するもの
- ・ **表彰式** 令和元年12月4日（水）  
合同庁舎第8号館講堂（東京都千代田区永田町1-6-1）
- ・ **選考方法** 各都道府県又は政令指定都市から推薦された作品を基に最優秀賞1編、優秀賞3編及び佳作5編以内を選定  
審査員長は 三田 誠広 氏（作家/武蔵野大学名誉教授）であり、ほか審査員は大学教授等10名

高校生区分

◆最優秀賞

大分県

大分県立国東高等学校双国校 二年

# 障がい者の家族として

長谷川 歩

世間から見た障がい者のイメージは、どのようなものだろうか。私が聞いたものは「怖い」「迷惑」「可哀想」「ガイジ」などだ。

そのことをネットで、障がい者の家族の前で、そして本人の前で言う人がいる。私はそれが嫌で、許せなくて、理解もできなかつたのだが、この夏の経験を通して、自分の考えがいかに薄っぺらく、偽善的であつたかを思い知つた。

私には広汎性発達障害の弟がいる(以下H)。私が小学二年生のときに生まれた子で、「H君、成長遅くない?」と友人に言われたときも、私はHをずっと「普通の子」と思っていた。なので母から、私を含めた兄姉に弟の障がいのことを伝えられたとき、心底驚いたし、また「普通」じゃなかつたことにショックを受けた。

けれど当時小学生だつた私は、「弟君のお世話、偉いねえ」という周りの評価に誇りを感じていた。その枕詞に「障がい者の」がつくことが明らかだつたからだ。周りの

の中で暴れて泣き叫び、他人に迷惑をかける弟に私は不甲斐なさを感じて、「本当にごめんなさい。」とHを抑えながら、運転をしていた支援員さんに言った。

「いいですよ。」と普段と変わらない声でおっしゃつたので、気を遣つてくれているのだらうと思い、私は一層惨めに感じた。そのとき彼女は付け加えた。

「まだ『大きい赤ちゃん』つて言えるもんね。」

彼女はベテランの支援員さんだつた。沢山の障がい者を見てきて、沢山の障がい者を導いている人が、そう言った。私のそのときの衝撃なんてお構いなしに、Hは叫び続け、私にしがみ付いていた。

挨拶をして家に帰り着いた途端、涙がとめどなく溢れた。

それはHの将来を考えたからだ。彼も年をとつて、私達と同じように中年になり、高齢者になる。「可愛いH君」じゃなくなる。世間が彼を許容しなくなる。

Hが成長した時、まだ「可愛いH君」として扱ってくれる人がどれだけいるだろう。急に大きい声をだして、意味が分からない行動をとる他人を、一体どれだけの方が尊重し、その家族を「偉いねえ。」ともてはやしてくれるだろう。

その問いに対する一部の答えが「迷惑」「可哀想」「ガイジ」なのだ。障がい者が家族でも身内でもない人にとつて、自分の理解の範疇を超える人間は異物なのである。

では障がい者は本当に怖くて、可哀想で、生まれている意

大人が私とHの関係をもてはやし、いつのまにか私も「障がい者の」Hがいることを羨望にしていた。Hの幼い愛らしさ、そして周りの大人のその評価があつたから、私は今までHを世話していただ。私は、今回の経験でそれがいかに考えなしであつたかを痛感できた。

今年の夏休みの数日間、障がいを持つた子どものお世話をする施設にボランティアに行つた。以前からHも通つていた施設だつたので、どのようなものか興味があつたし、なによりHの過ごし方が気になつてた。

私は困惑した。Hの態度が家にいるとき以上に荒かつたからだ。迷惑をかけることは最初からわかつていたが、現場にいると耐えられないものがあつた。「他人」に害を加える弟を「可愛くない」「恥ずかしい」と思う自分がいたのだ。そのHの気を必死に逸らそうとしている支援員さんを間近で見て、申し訳ない気持ちでいっぱいになつた。

子ども達を家に送るとき、Hがまた痲癩を起こした。車

味がないのか? 今回のボランティアの体験で、それだけは前よりも確固たる意志を持つて否定できた。楽しいこと、嬉しいこと、苦しいこと。それぞれ表情豊かに今を鮮烈に生きて、命を輝かせているその姿は、私達と何も変わらない、人生を謳歌している一人の人間だつた。その命に間違ひも貴賤もないと、心の底から思つた。

この経験によって、障がい者を蔑ろにする人にモラルが欠如しているとは思わなくなつた。H達の現実を正確に想像し、慮ることは家族でさえ難しいのだと、身を以て痛感したからである。私は障がい者の家族になりきれいでなかつた。彼らと過こさなかつたら、私は一生馬鹿なままで、将来Hを煙たがる「他人」になつていただらう。「可愛さ」から離れていく弟を支え、彼の障がいに対する「障害」を受け止める。その覚悟があつて、私はやつとHの家族になるのだと思う。

彼らを認め、理解するのは難しいと思う。それでも私は彼らを正しく知つてほしい。それは私がそうだつたように、自分の考えと直面して、人間として成長できる機会を、彼らから受け取ることができるからである。